

A.C.Пушкин の "Выстрел" にみられる完了体過去形の結果性について

佐藤 修

(東京外国語大学大学院博士前期課程)

はじめに

ロシア語動詞の体の不変的意味についてはこれまで様々な規定がなされている。完了体動詞の動作の結果性(С.О.Карцевский,И.П.Мучник)¹もその一つである。Гловинская(1982:10-11)は不完了体動詞にも動作の結果性をもつものがあるとして、動作の結果性を完了体動詞の示差的意味(отличительное значение)とは見なし得ないとしている。ここでは不変的意味あるいは示差的意味とはどのようなものか、ということは問題にせず、Масловが完了体過去形について(より具体的に)定めた個別の意味²に含まれる結果性についてみていく。本稿でいう結果性とは、ある動作が他の動作や状態と何らかのつながりを持つことをいい、したがって、結果性の最も明確なもの(発話時点まで結果が残存しているもの)がペルフェクトということになる。この結果性を動詞の体に関する文法素性[R]とし、

完了体過去形 : [+R]

不完了体過去形 : [-R]

として、動作の結果性を完了体過去形がもつ有標項と考える。このことを体のペア、дарить-подаритьで説明する。

Прежде всего мне нужно купить подарок жене. Но что ? Сумку я ей подарил³. Может быть — шарф? Но шарф я ей уже дарил, хочется купить что-нибудь новое, оригинальное. (Сумку не стоит покупать, так как она есть, она не нужна. Шарф не хочется покупать, потому что такой подарок был, не хочется повторяться.)

なによりも、妻に何か贈り物を買わなければならない。何がいいか。ハンドバックは買ったのがある。スカーフはどうだろう。でもスカーフはもう買った。なにか新しく、珍しいものを買ってやらないと。(ハンドバックは持っているから買って仕方がない、必要ない。スカーフは前に贈ったことがあるから買いたくない、繰り返したく

¹ Мучник (1971 : 96-102)

² 中心的意思と周辺的意思にわけられる

³ 以下、完了体過去形には下線 、不完了体過去形には下線 をそれぞれ施す。日本語訳については、動詞の体の意味が明確になるように、同様の下線を引いた。

ない。)

(Рассудова1968 : 23, 訳は筆者)

подарил は、動作の結果としてハンドバックが今あることを意味する。дарил も、贈った結果妻がスカーフを所有したという事実はあるが、しかし、体のペアをなす подарил とともに用いられて、強調されるのは「贈る」という動作自体の過程の中に発話者の観点があることである。つまり、スカーフが発話時点で在るかどうかは問題ではなく、「買ったことがある」ということに重きが置かれている。このように、「スカーフを贈った」という場合、完了体を用いれば結果残存についてマークされた有標の文となり、不完了体を用いれば結果残存について何もいわない無標の文となる。

次に Маслов が定めた完了体過去の個別の意味を示し、それから個別の意味それぞれがもつ結果性について、実際に Пушкин の “Выстрел,, のなかでみていく。

1. ロシア語動詞の完了体過去形の個別の意味

Маслов (1984 : 70-84) によるとロシア語動詞の完了体過去形は次のような個別の意味を持つ。

A. 中心的意味：具体的事実の意味 (конкретно-фактическое значение)

(1) Он открыл окно. : 一回の出来事 (разовое событие)

(彼は窓を開けた。)

(2) Он вошёл в комнату, открыл окно и снова вышел. : アオリスト

(аористическая разновидность)

(彼は部屋に入り窓を開け, また出て行った。)

(3) К вам пришёл знакомый. : ペルフェクト (перфектная разновидность)

(あなたにお知り合いの方が来ています。)

B. 周辺の意味 (периферийное значение)

(4) Он проговорил полчаса. : 持続性全体の把握 (значение охвата длительности)

(彼は 30 分話し通した。)

(5) Он два раза обернулся. : 一括化の意味 (суммарное значение)

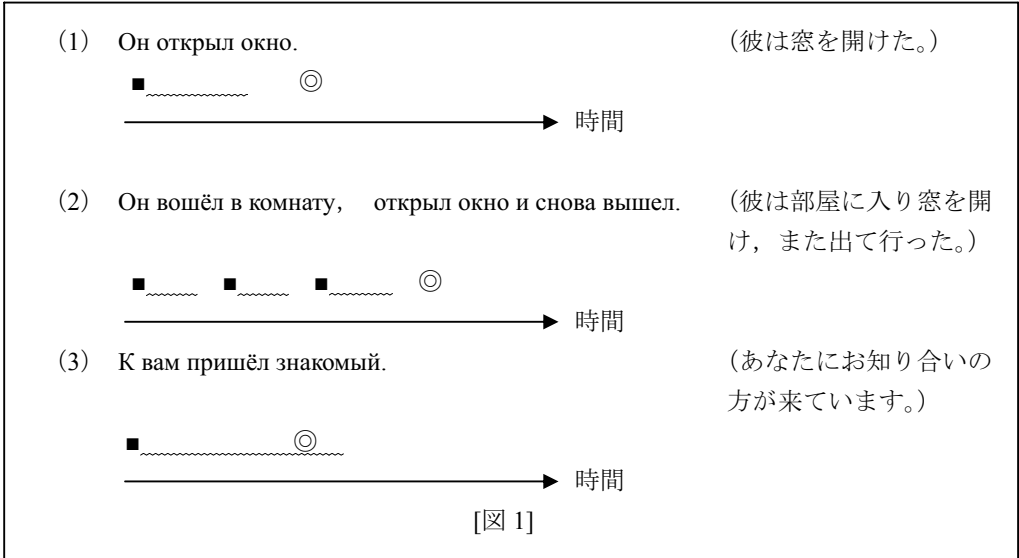
(彼は二度振り向いた。)

(3) のペルフェクトについては、結果性は自明である。アオリストについては、これは (1) の連続と考えることができる。そして、(1) について Маслов は、次のように書いている。

Он открыл окно. という孤立した発言はふつう、いま（発話時点）でも窓が開いていると解釈される。（Маслов1984：73，訳は筆者）

中心の意味について図で示すと次のようになる。

（発話時点，動作，結果残存をそれぞれ◎，■，_____で表す）



(1) の一回の出来事は過去の不定時点までの結果残存を表して（したがって、ここでは、ペルフェクト用法⁴ではない）、(2) のアオリストはその連続である。より詳しくいうと次のようになる。（体のペアをなす）動詞 **входить-войти, открыть-открыват, выходить-выйти** の語義はそれぞれ「入る」、「開ける」、「出る」である。これらの動詞を（体を選択して）用いて実際に文を作ると、完了体を用いた場合は上のように結果残存の意味が生じる。つまり、「部屋に入る」という動作の結果が残っているから続けて「窓を開ける」ことができるし、また「出て行く」こともできる。一方、不完了体を用いた場合、「入っては窓を開け出て行くのだった」と、反復の意味が含まれたり、また、開ける窓が入る部屋の中ではなく、どこかほかの場所にあることもありうるのである。

次に、B. の周辺の意味の結果残存に関する有標性を具体的な環境の中でみていく。

2. А.С.Пушкин の “Выстрел,” における完了体動詞過去時制

まず、この作品で用いられている完了体過去時制を示す。

⁴ ロシア語の過去形は形態的には完了体過去形、不完了体過去形の二つのみである。完了体過去形がどの用法で用いられるか、つまり、Маслов のいう個別の意味のうちのどの意味を持つかは文脈による。

過去時制	回数	比率 (%)
一回の出来事	30	14
アオリスト	163	76
ペルフェクト	14	6
持続性全体の把握	1	0.5
一括化	5	2.5
その他 (例示的な意味)	2	1
(合計)	215	

[表 1]

この表は文脈にそって筆者が分類したものである。カウントしたのはいわゆる-л 語尾過去形である。また、中心的意味については、発話時点での結果残存が明示的なものをペルフェクトとした。

“Выстрел., で用いられている完了体過去形のほとんどが Маслов のいう中心的意味をもつ。

まず一回の出来事について、結果性を文脈のなかでみる。次にアオリスト、ペルフェクトについて簡単にふれて、それから持続性全体の把握、一括化を意味する完了体過去形についてみていく。また、不完了体過去形の結果性についても随時ふれていく。

◆ 一回の出来事

- ① В прочем, нам и в голову не приходило подозревать в нем что-нибудь похожее на робость. Есть люди, коих одна наружность удаляет таковые подозрения. Нечаянный случай всех нас изумил. Однажды человек десять наших офицеров обедали у Сильвио.

とはいえ、彼に何か臆病に類したところがあるなんぞとは、私たちは疑ってみたこともなかった。その風貌だけで、そうした疑念を一掃する人間がいるものである。と、思いがけぬ出来事が、私たち一同を驚かすことになった。ある日のこと、私たち将校が十人ほどで、シルヴィオの家で昼食をよばれた。

(日本語訳は神西 (1967) による。以下同様。)

изумил は単独で用いられていて、この動作の結果を受ける部分はここでは書かれていない。結果を受けるのは、この出来事後、シルヴィオが将校たちのあいだで人気を落とすという動作である。不完了体過去形はどちらも状況を表し、疑ってみたこともない状況のなか昼食に呼ばれた時に、思いがけない出来事が起こったのである。

- ② Я смотрел на Сильвио с изумлением. Такое признание совершенно смutilo меня. Сильвио продолжал.

私は愕然としてシルヴィオを見まもった。まさかこうした告白を聞こうとは思いがけなかったのだから、私はすっかり狼狽してしまつた。シルヴィオは言葉をつづけた。

主人公が狼狽した結果は、ずっと後、シルヴィオの話が終わって、

- ③ Я слушал его неподвижно; странные, противоположные чувства волновали меня. 私は身じろぎもせず聴いていた。奇怪な矛盾だらけな感情が、私の心を揺り動かすのだった。

という部分に残っている。なお、②③の不完了体過去形の動作はいずれも継続を表している。

- ④ Он принял нас по-обыкновенному, ни слова не говоря о вчерашнем происшествии. Прошло три дня, поручик был еще жив. Мы с удивлением спрашивали: неужели Сильвио не будет драться?

彼はふだんに変わらぬ態度で私たちを迎えて、昨日のことは一言もいい出さなかった。三日たったが、中尉はまだ生きていた。私たちは案外に思つて、いったいシルヴィオは決闘しない気かな?と尋ね合うのだった。

「迎えた」という動作自体の結果が残っているとはいひ難い。しかし、この完了体過去形を含む文が次の Прошло を含む文と同様に、「案外に思つて、尋ね合う」という動作につながっていることは確かである。

次に、アオリストをみる。[表 1]でみたようにアオリストは最も多く用いられている。しかし、この用法は一回の出来事の連続と考えられるので、一例だけにとどめる。

◆ アオリスト

- ⑤ я сказал ему на ухо какую-то плоскую грубость. Он вспыхнул и дал мне пощечину. Мы бросились к саблям; дамы попадали в обморок; нас растасили, и в ту же ночь поехали мы драться.

僕は奴の耳に、なんだか気のきかないがさつな文句をささやき込んだのです。

彼は憤然として色をなすと、いきなり私に平手打ちを食わせました。たちまちふたりはサーベルへ飛びかかる、婦人連は気を失つて倒れるという騒ぎ。ふたりは引き分けられましたが、さっそくその夜のうちに決闘へ出掛けました。

сказал, вспыхнул, дал, бросились, расташили, поехали の動作が順次起こった。расташили と попадали は бросились の結果を受けての動作で、不完了体である попадали の動作は расташили の動作終了後もまだ続いている。поехали の結果として、小説では決闘の場面へと続く。

◆ ペルフェクト

- ⑥ однажды дал он мне шутя пощечину, шутя прострелил мне вот эту фуражку, шутя дал сейчас по мне промах; теперь и мне пришла охота пошутить. いつでもは冗談に私の頬を打たれた。またこれも冗談に、そらこの軍帽を射抜かれた。今はまた冗談に私を射ちそこなわれた。こんどは私の方で冗談がしてみたくなったのです。

теперь とともに用いられている пришла はペルフェクトであり、その他の一回の出来事の意味をもつ完了体過去形の結果を受けている。

以上が中心的意味に含まれる完了体過去時制である。続いて周辺の意味についてみる。

◆ 持続性全体の把握

- ⑦ В четырех верстах от меня находилось богатое поместье, принадлежащее графине Б***; но в нем жил только управитель, а графиня посетила свое поместье только однажды, в первый год своего замужества, и то прожила там не более месяца. Однако ж во вторую весну моего затворничества разнесся слух, что графиня с мужем приедет на лето в свою деревню. В самом деле, они прибыли в начале июня месяца.

私の持ち村から四露里のところに、В**伯爵夫人の所有にかかる豊かな領地があった。そこに住んでいるのは支配人だけで、伯爵夫人はただ一度、興入れのはじめの年に領地を訪れたきりで、そのときの滞在もひと月たらずだった。ところが私の隠遁生活が二度目の春を迎えたとき、伯爵夫人が夫君とともに、その夏を持ち村に過ごしに来るという噂が伝わった。果たして六月の初めになると、夫妻は到着した。

これより前の部分で、小説では主人公が田舎で暇をもてあましてしている様子が描かれている。二つの不完了対過去形はその描写の続きで、主人公が住む近所の状況を説明していて、どちらも動作の結果ではなく、動作の過程のなかに観点がある。そして、その状況のなかで посетила, прожила, разнесся, прибыли という過程が順次起こったのである。問題は持続性全体の把握の意味を表す прожила の結果性である。この場合、

- 暇をもてあましているのに伯爵夫人の領地に住んでいるのは支配人だけ

○ 伯爵夫人が来たという事実はあるが、1ヶ月足らず

という意識が主人公に込められているために強調を表す ж が用いられ、また「夏に」というのを на лето というふうに期間であらわしていると考えられる。つまり、прожила の結果を разнесся が受けている。

◆ 一括化

⑧ У нас в полку я считался одним из лучших стрелков. Однажды случилось мне целый месяц не брать пистолета: мои были в починке; что же бы вы думали, ваше сиятельство? В первый раз, как стал потом стрелять, я дал сразу четыре промаха по бутылке в двадцати пяти шагах. У нас был ротмистр, остряк, забавник; он тут случился и сказал мне: знать у тебя, брат, рука не подымается на бутылку. Нет, ваше сиятельство, не должно пренебрегать этим упражнением, не то отвыкнешь как раз. Лучший стрелок, которого удалось мне встречать, стрелял каждый день, по крайней мере три раза перед обедом. Это у него было заведено, как рюмка водки.

連隊にいました頃、私は射撃の名手のひとりに数えられておりましたが、あるときまるひと月ピストルを手にはせずにいたことがありました。修繕に出してあったのですが、そのためどうということになったとお思いになりますか、伯爵？ その後はじめて射撃を試してみますと、二十五歩の距離で酒壇をねらって、四発も立てつづけに失敗してしまいました。私どもの隊に、口の悪いひょうきんな大尉がおりましたが、それが偶然その場に居合わせましてね、こう申したものです、『こりゃつまり君、酒壇には手が振り上げられん、ということじゃよ。』いや伯爵、この練習というやつは決してばかにはなりません、それがないと観面に腕が落ちますからね。私が出会ったなかで一番の射手は、毎日かならず夕食前に少なくとも三発は射っておりました。一杯のヴォトカ同様、欠かしたことはありませんでした。

射撃について主人公が伯爵と話している場面である。不完了体過去形 считался, был, было の過程のなかで случилось, дал, стал, случился, сказал という過程が起きた。дал は一括化の意味をもつ。これが結果性をもつことはその後の失敗、大尉の悪口、そのまえの前置きから明らかである。удалось は他の完了対過去形とは切り離されていて、一回の出来事の意味をもっていて、その結果主人公はこの射手（シルヴィオ）の射撃の腕前を知ることになった。不完了体過去形 стрелял は反復の意味をもっていて結果残存の意味も含んでいる。というのは、小説のこのすぐ後の部分で、主人公が伯爵にシルヴィオが銃弾を蠅に命中させた（つまり、стрелял の結果射撃の腕が上達した）ことを話す場面があるからである。それでもやはり、毎日練習することに重きが置かれていることから、観点は反復の過程のなかであると考えられる。シルヴィオは銃弾を蠅に命中させた後も стрелял を続け

ているはずである。

一括化について、⑧のように不完了過去形が結果残存の意味を含む例をもう一つ挙げる。

- ⑨ Казалось, это огорчало его; по крайней мере я заметил раза два в нем желание со мною объясниться; но я избегал таких случаев, и Сильвио от меня отступился.

彼にはそれ（主人公との関係が疎遠になっていくこと）が辛いらしかった。少なくとも彼は二度ばかり，私に何か打ち明けたような素振りを見せたことがあった。ところが，私の方でそうした機会を避けているので，シルヴィオの方でも私のことはあきらめてしまった。（（）は筆者が挿入した。）

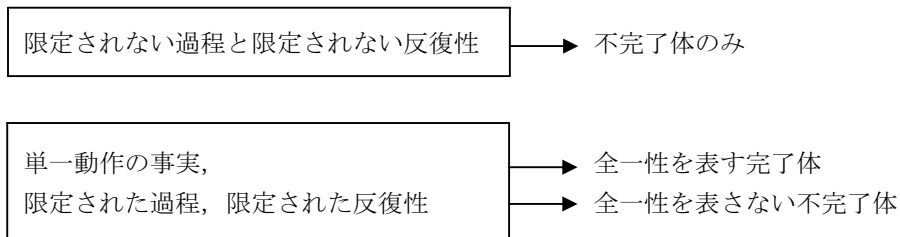
избегал は反復を表す。二度ほど気づいた（заметил）結果生じた過程はその反復の内に含まれている。問題となるのは отступился が избегал の結果を受けていることである。ここでは⑧よりも明確に結果性が認められる。しかし，この場合も⑧と同様に，シルヴィオが連隊を離れるその日まで主人公とシルヴィオの疎遠関係が続くところをみると，избегал には反復の意味に重きが置かれていると考えるべきである。

3. まとめ

動作の結果性についてみてきた。2. の[表 1]で示したように，Пушкин の <Выстрел> で用いられる完了体過去形の 76%がアオリストである。アオリストは話を進展させるものであるから，過去のことを物語る小説では，これは当然のことである。そして，一回の出来事を表す完了体過去形とそれに続く動作とのつながりは，①～④でみたように，確認された。また，周辺の意味についてもその結果性ははっきりと認められた。

不完了体過去形にも 2. の⑧⑨でみたように結果性が認められた。それでも，反復の意味をもち，この意味に重点が置かれていた。

過程と反復について，Рассудова（1967：7）は次のようにまとめている。



⑧⑨では不完了体過去形の（それぞれ，「蠅に命中させる」，「疎遠になる」までの）限定された反復が単一動作の事実と同等の意味をもって結果性を帯びたと考えることができる。つまり，不完了過去形は結果性をもつとしても（その中心的意味である）反

復して起こった動作の一部としてもつのであり、解釈の上でも結果性は必然的ではない。一方、完了体過去形では Маслов のいう個別的意味について（ペルフェクトに限らず）結果性は意味解釈に不可欠であった。以上のことから、完了体過去形の結果性についての有標性が示される。

<参考文献>

Гловинская, М. Я.: *Семантические типы видовых противопоставлений русского гоогола*, Москва, 1982

Маслов, Ю. С.: *Очерки по аспектологии*. Ленинград, 1984

Мучник, И. П.: *Грамматические категории глагола и имени в современном русском литературном языке*, Москва, 1971

Рассудова, О. П.: *Употребление видов глагола в русском языке*, Москв, 1982

Русская грамматика, т.1, 1980, Москва

金田一真澄, 1994, 「現代ロシア語の完了体動詞過去形によるペルフェクト用法について」『ロシア語研究』No.7, 東京

<露語資料>

А. С. Пушкин, 1975, *Собрание сочинений*, том5, Москва

<邦文資料>

プーシキン, 1967, 「その一発」『スペードの女王 ベールキン物語』, 神西 清 訳, 岩波書店